

## 倭の女王卑弥呼の最期——「以死す」再考

岡 本 健 一

はじめに——『魏志倭人伝』の「以死」をめぐる

倭の女王・卑弥呼は三世紀半ば、宿敵・狗奴国くわなとの戦闘のさなかに死んだ。『魏志倭人伝』は、その死を唐突かつ簡潔に「卑弥呼、以死す」と伝えるだけである。このため、女王の死因をめぐる、早くから(1)自然死説と(2)戦死説が出ていたが、一九七〇年代から作家・松本清張らの主唱する(3)王殺し説が加わって、多岐にわたる邪馬台国論争をいちだんとにぎわした。

私は十年前、小著『邪馬台国論争——卑弥呼の迷宮』<sup>(1)</sup>をまとめたとき、とくに「卑弥呼、以て死す」の項をたて、鼎立する三説を整理・紹介した。さいわい昨二〇〇三年春、「史話日本の古代」シリーズの第二巻『謎につつまれた邪馬台国』<sup>(2)</sup>(直木孝次郎編)に採録された。その縁であろう、昨秋、『松本清張研究』古代史特集号に「清張の邪馬台国論」を執筆する機会を与えられたのだが、久々に清張説を再検討した結果、「王殺し」説

(1)

こそ清張邪馬台国論の最大の学的貢献であること、しかも邪馬台国問題のなかでも重要な位置を占めることに思っていた<sup>(3)</sup>。

前稿では、『史記』夏本紀の著名な「鯨の最期」と比較して、いささか清張説の正しさを傍証しえたかと思う。ここでは、「以死す」の用例をいま少し広く日中両国の文献のなかに探り、秘められた「卑弥呼の最期」を明らかにしたい。それは同時に、「卑弥呼とはたれか」「箸墓はたれの墓か」「対狗奴国戦争とはなにか」など、古代史上の大問題に迫る手がかりもえられる、と期待されるからである。

## 1 「以死」の解釈

『魏志倭人伝』によると、卑弥呼は正始八、九年（二四七～八年）ころ、狗奴国の男王・卑弥呼との戦いの渦中で死んだ。卑弥呼の最期と前後の情勢は、『魏志倭人伝』にこう記されている。

(ア) 其の(正始)八年、太守の王頌、官に到る。

(イ) 倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥呼と素より和せず。倭の載斯・烏越等を遣はして郡に詣り、相攻撃する状を説く。

(ウ) 「郡の太守は」塞曹掾史の張政等を遣はし、因りて詔書・黄幢を齎し、難升米に拝仮し、檄を為りて之に告諭せしむ。

(㉒) 卑弥呼、以死す。  
 (㉓) 大いに家つかを作る、徑百余歩。徇葬じゆんそうする者、奴婢百余人。

問題の(㉒)「卑弥呼、以死す」は、A「以に(すでに)死す」と訓むか、B「以て(もって、よって)死す」と訓むかによって、意味が変わってくる。死因も(1)自然死、(2)戦死、(3)殺害(王殺し)の三様の解釈が生まれる。さらに、C「死するを以て」と訓む人もいる(なお、この場合、かつては「卑弥呼死するや」とも読まれた)。訓み方と意味・死因を整理すると、つぎの表のようになる。

●「以死す」の読み方

訓み方	文節関係		意味		死因	主唱者
	連続・継起	発語・強調	死んだ	死んだあと		
A 以に死す	連続・継起	発語・強調	死んだ	死んだあと	(1)自然死	内藤湖南・三木太郎
B 以て死す	因果関係		そのとき死んだ		(1)自然死	本居宣長・石原道博
			その結果、死んだ		(2)戦死	
C 死するを以て	独立・時間		その後、死んだ時		(3)殺害	阿部秀雄・松本清張
					(4)不特定	伊瀬仙太郎・三品彰英

A「以に死す」なら、(1)「自然死」を意味する。(㉓)の「檄を為りて之に告諭せしむ」と(㉒)「卑弥呼、以すに死す」の前後二文の間には、直接の因果関係を認めず、時間的な継起をしめすものとする。段落も「告諭せし

む」で変わる。内藤湖南・上田正昭・佐伯有清・三木太郎ら、多くの文献史家がこう読む<sup>(4)</sup>。

B 「以て死す」なら、発語の場合、(1)「自然死」を意味する。岩波文庫版『魏志倭人伝』の編訳者石原道博・直木孝次郎・原田大六・山尾幸久をはじめ、多くの研究者の読み方である<sup>(5)</sup>。前文との因果関係を認める場合、(2)「戦死」を意味する。(4)「倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯・烏越等を遣はして郡に詣り、相攻撃する」渦中に、戦死したと考えられる。段落は(ウ)の「告諭せしむ」で終わらず、(エ)「卑弥呼、以て死す」をへて(オ)「大いに冢を作る、……」までつづく。

卑弥呼の死は二四七―八年、七十歳代のことらしい。戦時で高齢という点からみて、(1)自然死(老衰・病死)と(2)戦死の双方のケースが考えられよう。

C 「死するを以て(死するや)」なら、死因は特定できない。後文の(オ)「大いに冢を作る」にかかり、「卑弥呼が死んだので(死んだとき)、大塚を作った」の意となる。伊瀬仙太郎・三品彰英らが主張した<sup>(6)</sup>。

## 2 「王殺し」説の登場

このように、訓みも解釈も帰一しなかったが、一九七一年、在野の古代史研究家・阿部秀雄が『卑弥呼と倭王』ではじめて(3)「殺害」説を唱えた<sup>(7)</sup>。「以死」を「以て死す」と訓む点では、(2)の「戦死」説と同じだが、直前の一句、(ウ)の「檄を為り之に告諭す」との間に直接の因果関係を認め、「郡使が檄を示して告諭した結果、死んだ」と解釈した。なぜなら、『三国志』鮮卑伝には「解諭」という表現があって、「普通では承服できない

事柄を説得して承服させる」難事件解決の場合に使われているからだ。しかも、『魏志倭人伝』では「以(もつて/それにて)死す」と書かれている。したがって、卑弥呼や難升米も郡使から、無理無体に「(匈奴国王に倭王の位を譲るよう)告諭」され、「その結果、卑弥呼は死んだ」と読むべきだ、というのである。

じつは、これより早く、栗原朋信が「以て死す」殺害」説に言及していた。まず「卑弥呼、以て死す」と読みたいところだが、こう「読むとなると、魏が檄を為つて難升米を告諭したために卑弥呼が死んだことになって、魏と女王卑弥呼との接近関係が、反対の結果を招来したことになるので理解に苦しむ」として、これを探らなかつた。かわりに「已に」説にしたがった、という。<sup>(8)</sup> 栗原のためらいは、示唆的である。(後述)

ついで、作家の松本清張が阿部の「殺害」説に与し、民族学上の「王殺し」の習俗とつがえて解釈した。すなわち対匈奴国戦争の敗北の責任を問われ、部族長らに殺された、と「王殺し」説に押しひろげたのだ。考古学者の奥野正男は、卑弥呼に告諭・問責して死に追いやった、と考えた。なかで、清張はもっとも詳しく、かつ繰りかえし説きつづけた結果、邪馬台国論争に新しい争点をすえた、といえよう。今日、古代史家のなかで支持する人は、かならずしも多くないけれど、在野の古代史研究者・ファンの間では、共鳴する人が多いように見受けられる。

清張が論拠としたのは、つぎの三つの事例である。<sup>(9)</sup>

第一に、『倭人伝』にみえる「持衰」<sup>(10)</sup>。倭人は航海の間、持衰を選んで、垢まみれのまま謹ませた。もし、船が暴風に遭ったり、航海者が病気になる場合、たちまち持衰を殺した、と記す。清張はこの持衰に注目した。失敗の責めを負って殺される持衰のように、卑弥呼もまた、倭国安寧のため持衰として生き、持衰として責め

を負って殺された、とみた。

第二に、『魏志』夫余伝にみえる麻余王殺害の記事。「旧、夫余の俗に、水旱調はず五穀熟らざれば、輒すなわち咎を王に帰し、或いは当に易ふべしと言ひ、或いは当に殺すべしと言ふ」とある。そこで、麻余王は死に、六歳の王子が後を継いだという。この事によって、古代朝鮮でも「王殺し」の風習があったことがうかがえる。しかも、『魏志』夫余伝／倭人伝では、「共立」された王／女王が責めを問われて死んだあと、幼少の王子／宗女が立つ、という文章の構造と情況の設定が、共通している。「卑弥呼の殺害」を暗示するかのようである。

第三に、古代世界に広くみられた「王殺し」の習俗。周知のとおり、民族学者J・G・フレーザーの『金枝篇』によると、古代の王は呪術師・魔術者・祭司王であり、健康や勢力が衰えはじめると、いつでも後継者によって殺された。とくに、早魃・飢饉・敗戦などのような公的災禍が彼の生命力の衰退を示すようにみえる場合には、殺されることが多かった、という。

清張は、右のような倭・夫余を含む世界的な「王殺し」の習俗を引いて、大胆に推定した。「狗奴国との敗戦によって彼女の力が衰退したことが証明された。もっとも、老齢でもあったから、呪力もおとろえていたであろう。かくて卑弥呼は重大な敗戦の責めにより、諸部族長たちに殺された」と。

### 3 「王殺し」への賛否

清張らの「女王殺し」説をめぐる、もちろん、反論も出た。

医師で古代史研究者の白崎昭一郎は、同じ『魏志』傳ふた撮伝に「今(孫)權、以死し」とある例をあげ、孫權は殺されたのでも詰め腹を切らされたのでもなく、自然に病死したのであって、卑弥呼の場合も自然死とするほかない、と説いた。<sup>(10)</sup> 民族学者の大林太良は、倭国でも夫余型の「王殺し」つまり「神聖弑逆」がおこなわれたとは即断できない、と留保した。<sup>(11)</sup> 中国人の謝銘仁は「以て死す」を「訓読みによるまったくの間違い」と一蹴した。<sup>(12)</sup>

これにたいして、奥野正男は清張に同調・補強した。「檄」で示し、口頭で内容を「告諭」し、そのつぎに結果を記す文例を、『三国志』などからあげたうえ、「以死」は「よって(それがために)死す」つまり「死に追いやられた」殺された」と解釈した。<sup>(13)</sup> 奥野はさらに、「檄」の内容は、倭国の王位交替(王のクビのすげかえ)をつよく求めたもので、魏(帯方郡)が軍事力をちらつかせながら、倭国内の安定をはかろうとしたとみた。<sup>(14)</sup>

のちに大部な『邪馬台国研究事典』をまとめる三木太郎は、阿部・清張・奥野の新説にたいして再三、きびしい批判をあびせた。郡使・張政の任務は、倭国の指揮官・難升米に詔書と黄幢を授け、檄によって難升米に対狗奴国戦の方策を与えることであって、阿部が「狗奴国王を倭王に擁立するため、卑弥呼を殺害させた」と説くのは、謬説もはなほだしい、と責めた。また、「告諭」の例を『三国志』のなかから博搜し、強制して刑罰を科する信賞必罰より、信賞懐柔のケースが多い。「告諭によって卑弥呼が死に追いやられたと判断することは、幻想に過ぎない」と退けた。さらに、それほど重大な告諭が、なぜ難升米ではなく、卑弥呼に向けられなかったのか。以(すでに)死んでいたからだ。「魏朝から死をたまわった」などの臆測を生じる可能性は皆無、と斬り捨てた。<sup>(15)</sup>

奥野もくりかえし自説を補強している。はじめに掲げた『魏志倭人伝』の記事(上のア・オ)をいま一度追うと、正始八年(二四七)以後の倭国内と帯方郡の緊迫した情勢がよくわかる、という。すなわち、

(ア)郡太守王頌が急遽、洛陽の官に上り、倭国情勢を報告・協議した。

(ただし、ここは、帯方太守・弓遵きゆうじゆんの戦死したあと、新任の王頌が帯方郡の官衙に着任した、と読むのがふつう)<sup>(16)</sup>

(イ)卑弥呼が帯方郡に特使を派遣、狗奴国戦争の状況を訴えたからだ。

(ウ)太守は帰任すると、ただちに塞曹掾史の張政等を倭国に特派した。

(ニ)郡使は詔書・黄幢を難升米に授け、檄を作って難升米に告諭した。

そして、問題の(オ)「卑弥呼、以死す」とつづく。さらに、このあと

(カ)男王を立てたが国中が服さず、千余人の死者をだす争乱となった。

(キ)ふたたび宗女の台与とよを立てて王に戴くと、ついに国中が定まった。

(ク)郡使は台与に檄で告諭し、平和回復を見届けたあと、郡に帰った。

奥野によると、『倭人伝』のこの一節は「時間の流れにしたがって一連の事件を順次記し」たもので、告諭以前に卑弥呼が死んでいた、と深読みする根拠はない。魏の対朝鮮政策が徹底した軍事支配につらぬかれていたと同様、対倭政策も重装備の兵士団を率いて倭王の交替を迫るものだった、と解釈した。<sup>(14)</sup>

替否両論の最後に、共感をしめず佐伯・直木の見方と、中国の沈安仁の批判をあげておこう。

佐伯は先の『魏志倭人伝を読む』で、「卑弥呼、以に死し、大いに冢を作る」と読み下し、「老衰」とみてい



るようだ。ただ、「卑弥呼の死」の項でまっさきに「王殺し」説をあげ、「原始的國家の王には、何らかの咎によって殺された例が多い」と記したうえ、つぎのように「王殺し」の蓋然性も示唆している。

詔がだされた「正始六年の段階で、すでに匈奴国とのあいだの関係は、一触即発の危機的狀況にあった。倭の女王卑弥呼を盟主とする倭国諸國間の動揺がきざしはじめていたのであろう。動亂の季節に倭国が入りつつあったのは、卑弥呼の〈鬼道〉による呪術的權力が、病氣や老齡などによって弱体化したためではなからうか」(抄出)<sup>(17)</sup>。

直木は一貫して「以て死す」と読む。早くから松本清張の邪馬台国論(位置論や一大率論)に共感をしめしたが、清張主唱の「王殺し」説についても大きな関心を寄せ、拙論を編著『謎につつまれた邪馬台国』に採用した。

「以て死す」を「卑弥呼の死の政治的な意味と、卑弥呼の王權の構造」をさぐるキーワードの一つとみている。<sup>(18)</sup>

沈は、卑弥呼の最期にかんする記述が、死亡よりも葬儀に重きをおく点に注目して、こう主張した。「葬儀の盛大さはまた、卑弥呼が匈奴国に対する戦争に偉大な功績をたてたことを物語っている。：倭人伝の、こうした簡潔かつ寓意のある書き方は、卑弥呼の異常な死という、さまざまな推測を否定しているのである」と。<sup>(19)</sup>

#### 4 鯨の治水と最期 — 『史記』夏本紀の「以死」

阿部・松本・奥野の「王殺し」説はまことに興味津々で、右のように賛否とりまぜて反響をよんだ。私も、先の小著『邪馬台国論争』で清張説を中心に紹介したが、その資料収集の過程で、たまたま『史記』「鯨の治

水伝説」のなかに「以て死す」の類例を見出した。そして、先ごろ清張論執筆のため、あらためて検討したところ、「王殺し」説を支持する重要な史料と気づいた次第である。

これまで、「以て死す」が平たいことばのゆえか、「告諭」とちがって、どんな場合につかわれたかといった、ごく基本的な議論さえなかったように思う。清張没後、新たな展開がみられないいま、膠着状態を破る手はじめに、『史記』五帝本紀第一と夏本紀第二、『書経』洪範にみえる「鯀の治水」伝説から検討してみよう。まず、その要約を記す。

帝堯の時、黄河の洪水が天まであふれんばかりになった。堯は治水のできる人物を求めた。群臣の意見を聴きいれて、黄帝の孫・鯀を登用して治水にあたらせた。九年たっても、洪水は治まらず、まったく成果があがらなかった。堯はさらに人材を天下に求めて舜を得た。舜は天下を巡幸したところ、慘憺たるもので、かえって水嵩がまっていた。そこで、舜は鯀を東方辺境の羽山におしこめて、死にいたらしめた<sup>(20)</sup>。(五帝本紀では「羽山に流し、東夷に変えた」となっている)。

神話学者・袁珂は、鯀の治水神話の断片を集めて、つぎのように復元した<sup>(21)</sup>。

鯀は治水の切り札として黄帝の命をうけたものの、なす術がなかった。たまたま「黄帝の秘宝〈息壤〉を使えば、土がかぎりなくふえ、洪水を治められる」と教えられた。ひそかに黄帝の息壤を盗みだし、大地に投ずると、山をなし堤防を築き、逆巻く洪水もついに干上がってしまった。それと知った黄帝は激怒



と書いたとき、『史記』冒頭のよく知られた「鯀の最期」の記事を、念頭に浮かべたにちがいない。もし、そうなら、卑弥呼の死もまた、殛される(放逐されて死ぬ)に近い状況(自死・殺害)だったと、陳寿は認識していたらう。

東洋史家の古賀登は、この鯀と禹の治水伝説を下敷きにして、『出雲国風土記』の「天の下造らししオホナモチの父スサノヲのイメージが造形された、という。<sup>(22)</sup>『風土記』の編者にしてしかり、まして『三国志』の著者なら、鯀の責任のとらされ方にならって、卑弥呼の責任のとり方を考えることは、十分にありえよう。

## 5 史書にみえる「以死」の例

「以死」の辞句は、『史記』にかぎらず、しばしばこうした含意のもと、いわば成語的表現として使われたようである。広く史書にみえる「以死」の意味をさぐるため、まず『史記』『三国志』など二十五史と、『春秋左氏伝』など十三経の電子テキスト版について、「以死」の用例を検索したところ、つぎの結果が得られた。二十五史全体で七六一段、十三経で一三〇段<sup>(23)</sup>にのぼる。

〔二十五史〕 史記 38 漢書 14 後漢書 28 三国志 33 旧唐書 36 新唐書 56 その他 556 計 761

〔十三経〕 書経 9 詩経 9 儀礼 13 礼記 23 左氏伝 46 孟子 5 その他 25 計 130

『史記』から『三国志』まで通覧するかぎり、B「以て死す」と読む場合が、断然多い。もちろん、「以死報国」「以死奉詔」「以死守之」「敢以死陳」などのように、「死を以て」と名詞形で読む例が圧倒的に多いけれ

ど、その場合も、「以て(それによって)死す」と動詞形で読むのと同じ忠誠・挺身のニュアンスがある。「以て」は単なる発語ではなく、「鯨の悲劇」と同様、因果関係をしめし、刑死・賜死・諫死・戦死・自死・遭難・殉職・奔命(過労死)・事故死、さらに決死の覚悟を表すようにみえる。

これに比べると、A「以に死す」と読む場合は、きわめて少ない。『三国志』にかんしては、先にふれた呉志・傅叡伝の本文「今(孫)權、以死し、孤を諸葛恪に託す」の一例だけである。これは「すでに死す」の意と解され、異論がない。すぐあとの裴注はらひゆうに「今權、已に死し、孤を諸葛恪に託す」と同文があつて、決め手となつているからだ。これとよく似た例が『後漢書』にみえる。二世紀末、黄巾の乱のさい、黄巾軍のかかげたスローガン「蒼天已に死す、黄天当に立つべし」(皇甫嵩伝)である。この合言葉は、周知のとおり、それらしい現代に至るまで、革命や変革、選挙による政権交替を求めるときに援用されてきたが、しばしば「蒼天以死」のかたちでも用いられるのである。この場合も、「孫權以死／已死」と同じく、「蒼天すでに死す」と読む例に数えられよう。<sup>(24)</sup>

C「死するを以て(死するや)」と読む例も、多くはないようである。『三国志』のなかでは、倭人伝と同じ卷三十の烏丸伝の例が、これに該当しようか。烏丸の葬送儀礼について、「特に犬は、死者の神靈を護つて赤山まで導いてゆく役目を負わされている」と記したあと、「如中国人以死之魂神歸泰山也(ちょうど中国の人が死ねば魂が泰山に帰すのと同じように考えられているのである)」と説明したくだけりである。<sup>(25)</sup>

つぎに、具体的に著名な歴史上の人物・事件を中心に「以て死す」の例をあげ、その意味するところを通時

的に再確認する。主な事例については、周知のことながら、前後の文脈を示す。

番号	人物	「以死」を含む本文	死因	出典
①	楚・屈原	於是懷石、遂自投汨羅以死	自死	史記・屈原伝
②	晋・伯宗	伯宗之以死	殺害	潜夫論・賢難
③	楚・子重(爾)	爾多殺不辜、余必使爾罷於奔命以死	奔命	春秋左伝・成公年
④	梁・人民	厚斂于民以養禽獸、而使民饑以死	餓死	孟子、孟子集注
⑤	漢・公卿	公卿以下必以死争、不奉詔	必死	漢書・史丹伝
⑥	蜀・諸葛亮	臣敢竭股肱之力、効忠貞之節、繼之以死！	挺身	三国志・孔明伝
⑦	宋・范曄	蔚宗(范曄)……遂被誣害以死	刑死	申范
⑧	天若日子	天若日子寝朝床之高胸坂に中りて以て死にき	神罰	古事記・上卷
⑨	楠木正成	吾未可以死也	戦死	日本外史
⑩	永山弥一	軍敗れて自ら腹を割り、以て死す	敗死	近世名譽英雄伝
参考	板垣退助	板垣可以死、自由不会死	遭難	板垣退助・遭訓名言

① 屈原、汨羅の淵に死す(前二七八年ころ)

『史記』の屈原列伝によると、戦国時代、楚王一族の屈原は、賢者や有能な者を抜擢し、国務に精励したが、讒言にあつて王から疎んじられ、ついに左遷された。さらに、迫害をうけたため、放浪のすえ、汨羅の淵に身

を投じた。死に臨んで屈原は「懐沙(石を抱いて沈む)」の賦を作り、最後をこう結んだ。「世溷りて吾を知らず、心謂くべからず。…明らかに以て君子に告ぐ、吾將に以て類(手本)を為さんとす、と」。そして、賦題のごとく「是に於いて石を懷き、遂に自ら汨羅に投じて以て死す」と伝えられる。<sup>(26)</sup>

④人民、苛斂誅求のため餓死す(前三三六年)

孟子が遊説して梁(魏)の恵王に会ったとき(恵王三十五年)の、よく知られた対話。孟子が「刃をもって民を殺すのと、悪政を行って民を死にいたらせるのと、相違があるでしょうか」と尋ねた。恵王が「相手を殺すということで、どちらも相違はない」と答えると、孟子は質した。「王の台所には肥えた肉があり、厩には肥えた馬がつながれている。しかも民には飢えた気配があり、野には飢えた行き倒れがある。これは民の食うべき食物を獣が食っているからで、獣を率いて行って人を食ませているようなものだ。どうして民の父母たるの道であらうか。…どうして、生きている人民をば、餓死させてよかろうか」

『孟子』の原文は「民有飢色、野有餓<sup>がひ</sup>卒。此率獸而食人也。…如之何、其使斯民飢而死也」で、「以死」そのものはみえないが、中国の注釈家は、「厚斂于民以養禽獸、而使民饑以死」(人民から収奪して禽獸を養い、人民を飢え死に追いやる)と敷衍・要約している。「以死」の意味がよく出ていよう。<sup>(27)</sup>

⑥蜀・諸葛孔明の覚悟(二三三年)

章武三年(二三三)春、劉備は永安で重体に陥ったため、諸葛亮を成都から呼び寄せ、後事を託して言った。「君の才能は曹丕の十倍はあり、きっと国家を安んじ、最後には大事業をなすとげることができよう。もしも後継ぎが輔佐するに足る人物ならば、これを輔佐してやってほしい。もしも才能がないならば、君は国を奪う

がよい」。

亮は涕泣して言った。「臣は敢へて股肱の力を竭し、忠貞の節を効し、之を継ぐに死を以てせん(最後には命を捨てる覚悟です)<sup>(28)</sup>」

⑦ 范曄の冤罪(四四六年)

『後漢書』の著者范曄(蔚宗は元嘉二十二年十二月(四四六年一月)、大逆事件にかかわった罪で処刑された。いささか長くなるが、その経緯を、吉川忠夫「『後漢書』解題」によってたどっておこう。<sup>(29)</sup>

時は劉宋・文帝の「元嘉の治」の世。范曄は太子詹事(東宮職の衆務を総攬)の要職にあったが、孔熙先なる首謀者にだきこまれ、病弱の文帝に代わって弟の彭城王劉義康(当時、政争に敗れて失脚、江州諸軍事・江州刺史に左遷されていた)を天子に奉戴せんとする計画に加わった。しかし、王族のなかから密告者が出たため、党与は一網打尽に逮捕・投獄され、建康の市において公開処刑された。とくに、范曄の場合、一族あわせて十二名が犠牲となり、族滅に近い処罰をうけた。のみならず、世々の歴史家からも指弾され、范曄といえば「救いようのない反逆者」の印象をうえつけられた、という。

范曄の冤罪を晴らさんとする史家が現れるのは、ようやく清朝にいたってからである。そのひとり、王鳴盛は「范曄の謀反事件はでっちあげだ」と弁護して、こう主張した。「蔚宗は性軽躁にして謹まず、妄人の孔熙先と往還せしは是れ其の罪なる耳。決して当に謀反の事有るべからざるなり」と。<sup>(30)</sup>

ついで、陳澧も范曄の冤罪を晴らすため『申范』(一八六八)を著し、その序文でつぎのように弁じた。<sup>(30)</sup>  
ああ、千古の至冤、いまだ范蔚宗のごとき者あらざるなり。…一の不備なきも、当時の人これを誣ひ、後



の史家これを書き、史を読む者従ひてこれを唾罵すること、ここに千百余年たり。禮、宋書・南史を読み、てその冤なるを疑ふ。…けだし、蔚宗才を負み、俗に嫉まれ、驟々恩寵を蒙り、而して自ら防檢せず。其の甥謝綜、孔熙先と謀反す。蔚宗之を知るも、其の小兒なるを輕んじ、以て上聞せず。遂に誣害せられて以て死す。

⑨ 楠木正成の赤坂城脱出(一三三三年)

頼山陽『日本外史』(卷之五)は、正成の赤坂城脱出のさいの策略と心情を、つぎのように叙している。

正成、衆に謂ひて曰く、「吾天下に先んじて大事を挙げ。固より生を圖らず。然りと雖も、天子在せり。吾未だ以て死す可からざるなり。吾今佯り死せば、敵則ち去らん。去らば則ち復起りて、彼をして奔命に疲らしめん。是れ軀を全くして、敵を亡すの術なり」と。<sup>(31)</sup>

⑩ 西南戦争で自死した永山弥一(二八七七年)

岡田良策編輯『近世名誉英雄伝』は、西郷隆盛ら幕末維新期の英雄五十人を簡潔に論評したものが、旧薩摩藩士の永山弥一について、つぎのように記している。<sup>(32)</sup>

旧藩の茶道を勤めけるが、其性剛邁、頗る武術に長じたり。…戊辰の役には…軍功あり。平定の後、陸軍少佐に拝せられ、開拓屯田兵を設けられける時、長となる職を辞して故山へ帰り、十年西郷暴挙の時、其徒に加はり、軍敗れて自ら腹を割り、以て死す。

花も皆ちりての後、誰をか語りもやらぬうたて世の中

(参考)板垣退助の遭難(一八八二年)

検索エンジン「グーグル」で「以死」を検索していたら、おもしろい事例にぶつかった。中国のホームページ「遺訓名言」のなかに、「板垣死すとも」の中国語訳が出ていたのである。参考欄にあげた「板垣可以死、自由不会死」だ。板垣は、もちろん「畳やベッドの上で死ぬ」自然死をいつているのではない。中国語訳の「以死」は、まさに不慮の遭難・事故死を表すことばであろう。<sup>(33)</sup>

以上の事例でも明らかのように、「以て死す」と訓むときは、おおむね尋常の自然死ではない。くりかえしになるが、賜死・刑死・諫死・戦死・自決・殺害・遭難・殉職・奔命、現代風にいえば事故死・過労死まで含めて、さまざま原因による非業／覚悟の死をさしている。

注意されるのは、非命に倒れた人びとの死を、しばしば説明を節略して簡潔に「以死」と(動詞形・名詞形の双方で)表現することである。たとえば、「関羽・張飛以死」(動詞形)「伯宗之以死」(名詞形)などという。この「以死」が決して尋常の「死」を意味しないことを、伯宗の場合について確認しておこう。

## ② 伯宗之以死(前五七六年)

『春秋左氏伝』によると、戦国時代の成公十五年、晋の伯宗は郤氏一族に憎まれ、中傷によって殺された。彼の妻は日ごろ、伯宗が晋侯に朝見するたびに、こう戒めていた。「盗人は家の主人が留守でないのを憎み、治者がいるのを悪むと申します。子は直言がお好きだから、必ず憎しみを買って難に遭われますよ」<sup>(34)</sup>

原文は「晋三郤害伯宗、譖而殺之晋の三郤、伯宗を害み、譖して之を殺す」<sup>(35)</sup>だが、後漢の王符が著した『潜夫論』賢難第五では、これを縮約して「伯宗之以死」と記す。「伯宗之死」ではない。先の板垣語録の中国語訳

と通じるところがあろう。

もっとも、『魏志倭人伝』の「卑弥呼以死」にたいして、『太平御覧』所引の『魏志』には、この「以」字がない。だから、「以死」と「死」は同じ意味といえるのだろうか。「以死」の特別なニュアンスに注意した前記の栗原朋信は、こう説いて惜しんでいる。「陳寿が、わざわざ〈以〉字を入れているのは、…事件の推移を極めて正確に、しかも簡明に描いているのである。したがって……御覧の倭人伝関係の記事は、この部分に関するかぎり、史料としては内容が不完全である」と。<sup>(8)</sup>

栗原の指摘は、的確かつ重要である。それならばいっそ直截に、「以(すで)に死す」ではなく、「以て(それで)もって」告諭されたのが原因で「死す」である、と明言していただきたかった思いがする。

## むすび

こうした「以死」の事例を考えあわせると、『倭人伝』の「卑弥呼、以死す」の場合も、清張や栗原の指摘どおり、特別の意味に留意すべきであろう。「檄を為りて之に告諭せしむ」という直前の緊迫した情況が、突然消えさり、対狗奴国戦争の結末を告げぬまま、まったく無関係の局面に転換して、「卑弥呼、以に死す」と読むのは、無理があるように思われる。

もとより、戦死か殺害か自死か、それとも過労死か事故死か、卑弥呼の死因はわからないけれど、たんなる老衰や病死でなかったことは、ほぼ確かであろう。されば、清張のいう「持衰」のごとく一身に戦争責任と罪

障を背負い、犠牲となって従容と死についたのかもしれない。「告諭」の内容に驚いて死んだとも想像されよう。対匈奴国戦争に心身のエネルギーを消耗して死んだとも考えられる。

古代史家の水野祐は、大著『評釈 魏志倭人伝』のなかで、檄でしめた告諭の内容を推定・復原したうえで、卑弥呼の最期について「想像による結論」を下している。「卑弥呼は告諭を受けたために死んだのではなく、また対戦中に戦死したのではない。ひたすら宮殿内の齋場において戦勝を祈り、荒業をつづけていたはずである。そして和平が成立すると、過労の老巫はホッと安堵して死んだか、戦争の責任をとって自ら死の道を選んだのであろう」(抄出)<sup>(37)</sup>と。

私の結論も、ほぼこれに近い。わずかに「以死」の用例を検討した結果、卑弥呼は奔命に疲れはて、告諭によるショックも重なって、死んだのではないかと推定するところまで来た。いずれにせよ、卑弥呼の死と前後して、戦争は終結し、卑弥呼は「徑百余歩」の大家——おそらく直径約一五〇メートルの後円部をもった大型前方後円墳——に葬られ、百余人の殉死者に従われたのであろう。

「卑弥呼、以死す」をこのように理解するとき、卑弥呼とはどのような女人がふさわしいのか、卑弥呼の墓はどこに求められるのか、さらに、対匈奴国戦争とはいかなる戦だったのか、次稿では、近年の考古学の成果に学びながら、はじめにもかかげたこれらの課題を追究したい。

(平成十七年一月尽)

注

- (1) 拙著『邪馬台国論争——卑弥呼の迷宮』一九九五 講談社選書メチエ
- (2) 拙稿「卑弥呼、以て死す」『謎につつまれた邪馬台国——史話 日本の古代・二』（直木孝次郎編 二〇〇三 作品社）
- (3) 拙稿「松本清張の邪馬台国論」『松本清張研究』6号「特集 清張古代史の軌跡と現在」二〇〇五年三月刊予定。ただし、ここでは「史記」の「蘇以て死す」の一例しかあげられなかった。
- (4) 内藤湖南「卑弥呼考」難升米の項『藝文』一一二・三・四 一九一〇『内藤湖南全集』第七卷 一九七〇 筑摩書房、佐伯有清編『邪馬台国基本論文集Ⅰ』一九八一 創元社、三木太郎『魏志倭人伝の世界』一九七九 吉川弘文館。ただし、清張の提唱後、「以て死す」から「以に死す」に変わった人も少なくない。
- (5) 本居宣長『馭戎慨言』上之巻上 一七七八『本居宣長全集』第八卷 一九七二 筑摩書房など
- (6) 三品彰英編『邪馬台国研究総覧』「以死」注解 一九七〇 創元社
- (7) 阿部秀雄『卑弥呼と倭王』一九七一 講談社
- (8) 栗原朋信「魏志倭人伝にみえる邪馬台国をめぐる国際関係の一面」『史学雑誌』73—12 一九六四年二月号（佐伯有清編『邪馬台国基本論文集Ⅲ』一九八二 創元社）
- (9) 松本清張『邪馬台国——清張通史①』講談社文庫 一九八六。文庫版は元版（一九七六）・全集版をもとに大幅に改稿・添削されている。ここでは文庫版によった。
- (10) 白崎昭一郎「邪馬台国は何万石？」『季刊邪馬台国』6号 一九八〇ほか。なお、後述（13頁）参照。
- (11) 大林太良『邪馬台国』中央新書 一九七七
- (12) 謝銘仁『邪馬台国 中国人はこう読む』一九八三 立風書房
- (13) 奥野正男『邪馬台国はここだ』一九八一 毎日新聞社
- (14) 奥野正男『邪馬台国はやっぱりここだった』一九八九 毎日新聞社

- (15) 三木太郎『前掲書』(注4)、同『魏志』倭人伝の〈告諭〉と〈以死〉、『北海道駒沢大学研究紀要』17号 一九八二
- 二
- (16) 松本清張・奥野正男のほか、武光誠編『邪馬台国辞典』一九八六 同成社も、王頎が朝廷に報告した、とする。
- (17) 佐伯有清『魏志倭人伝を読む・下』二〇〇〇 吉川弘文館
- (18) 直木孝次郎「一大率」『ゼミナル日本古代史』上 一九七九 光文社、直木編『前掲書』(注2)、同『日本古代国家の成立』講談社学術文庫 一九九六
- (19) 沈仁安『倭国と東アジア』一九九〇 六興出版
- (20) 吉田賢抗注解『史記』本紀 新釈漢文大系 一九八一 明治書院など
- (21) 袁珂『中国の神話伝説』上 一九九五 青土社
- (22) 古賀登『神話と古代文化』二〇〇四年 雄山閣
- (23) 台湾・中央研究院「漢籍電子文獻(資料庫)」<http://chinese.daito.ac.jp/handy/new/>による。同じ段のなかで、同一の語句がくりかえされる場合は、あわせて一回と数え、異なる語句の場合は、異なり語数のとおりカウントする。また、「以死者」のような本来の「以死」の意味から外れるものも、本稿では数に含めた。
- (24) 二〇〇四年三月の台湾総統選を前にして、国民党側のキャンペーンのなかで、この黄巾軍のスローガンがとりこまれた。興味深いことに、パンフでは「蒼天以死、黃天当立、歲在甲子、天下大吉！ 民進黨大勢已去、；天意民心不可逆！」と書きながら、街頭デモ用の(『三国志』の時代をおもわせる)幟には、「蒼天已死」と大書してあった。『魏志』の「孫權以死／已死」の使い分けとともに、これは単なる偶然か修辞上の工夫であって、まったく同じ意味なのだろうか。
- (25) 今鷹真・小南一郎・井波律子訳『三国志II』烏丸伝 世界古典文学全集 一九八二 筑摩書房
- (26) 水沢利忠注解『史記』屈原夏生列伝 一九九三 明治書院
- (27) 内野熊一郎注解『孟子』新釈漢文大系 一九八一 明治書院、藍烈『孟子集注』<http://www.30life.net/cgi-bin/>

- topic.cgi-forum=1&topic=240&show=120 に於る。
- (28) 今鷹真他『前掲書』(注25)諸葛亮伝、二十四史『三国志』蜀書諸葛亮伝 一九九五 中華書局
- (29) 吉川忠夫校注『後漢書』第一冊 二〇〇一 岩波書店
- (30) 陳澧『申范』 [http://www.geocities.co.jp/HearLand/Hanamizuki/1426/chin\\_rei.htm](http://www.geocities.co.jp/HearLand/Hanamizuki/1426/chin_rei.htm) に原文と訓読・現代語訳と簡単な補注が載っている。
- (31) 頼山陽『日本外史』巻之五 小宮水心註解 一九二二 立川文明堂
- (32) 岡田良策編輯『近世名譽英雄伝』一八八四 辻岡金松堂 <http://www.konnan.wu.ac.jp/kikuchi/reki/isin.htm>
- (33) [http://www.content.edu.tw/vocation/foreign\\_language/ks\\_ss/famous/banhan.htm](http://www.content.edu.tw/vocation/foreign_language/ks_ss/famous/banhan.htm) に於る。中国語訳の「板垣可  
以死」は「可・以死(以て死すべし)」というより、「可・死(死んでもよい)死ぬ価値がある)」の意なのかもしれ  
ないが、上にもってきた「以死」の原義と通じる訳語と思われる。ちなみに、他のサイトでは「板垣雖死、自由不死  
(不亡)」の訳がみえる。北京大学歴史学系 [http://www.hist.pku.edu.cn/club/dispbbs.asp?BoardID=31&ID=3142&](http://www.hist.pku.edu.cn/club/dispbbs.asp?BoardID=31&ID=3142&page=1)  
[page=1](http://www.hist.pku.edu.cn/club/dispbbs.asp?BoardID=31&ID=3142&page=1)に於る。
- (34) 小倉芳彦訳『春秋左氏伝』(中) 岩波文庫 一九八九
- (35) 鎌田正注解『春秋左氏伝』新釈漢文大系 一九八一 明治書院
- (36) 王符著(汪继培箋)『潜夫論箋』一九七九 中華書局
- (37) 水野祐『評釈 魏志倭人伝』一九八七 雄山閣